



判決の前日行なわれた公害被害者全国大会（新潟市県教組会館で）

公害へ怒りと熱気

新潟で被害者全国大会

判決を前に氣勢

【新潟】全国の公害被害者や支援団体で組織している「公害対策全国連絡会議」主催の「第三回公害被害者全国大会」が新潟水俣病訴訟判決前日の二十八日午後一時半から約四時間、にわたり新潟市の県教組会館で開かれた。

会場壇上には「完全勝利で公害撲滅の突破口を」の紙がはられ、新潟水俣病患者のほか白地に緑の文字で「三井は罪状を認め全責任をとれ」と書いたタスキがけの富山イタイイタイ病患者や熊本水俣病、安中カドミウム、四日市ぜんそくなど各地の公害被害者代表約三百人が参加した。

また、新潟水俣病訴訟で補佐人をつとめた宇井純策大助手、消費者運動の旗手ラルフ・ネーター氏が日本に派遣した「市民のための法律研究センター」のトーマス・リフソン氏らも姿を見せた。報道カメラマンとして世界的タイム・ライフ誌のユージン・スミス氏も出席者の写真をとって回るなど会場は公害への怒りと熱気でムムムンした。

大会はまず主催者側の全国公害連代表委員、新村猛・元名古屋大学教授があいさつ、「富山イタイイタイ病は学者、弁護士、労組、政党などの協力でやっと勝利判決

を得た。あすはいよいよ新潟判決だ。勝訴は間違いない。しかし、勝訴してもからだは直らない。最良の策は公害が起きる前に予防することだ。各地の尊い経験を交流し合って各地に持ち帰り、戦いの輪を全国に広めてほしい」と述べた。

熊本水俣病訴訟派代表の渡辺栄蔵さん（七三）は「きょうはどうかかったことはない。あすは勝訴をつかめるからだ。私は新潟の人たちがうらやましい。私たちの訴訟はまだまだ時間がかかる。どうなるか心配だ」と熊本の訴訟の支援を訴えていた。

最後に「新潟水俣病の勝利」失われつつある生命と健康、自然を取り戻すため、戦いの輪を広げよう、との大会宣言を大きな拍手で採択、集会を終えた。